

岬之町だより

第5回 「西の端からバスに乗って」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

現在、私は上田中町に住み、岬之町の日銀下関支店まで通勤している。気候が良ければできるだけ歩くようにしているが、雨の日や寒い朝はバスを使うこともある。サンデン交通の唐戸方面から下関駅に向かうバスは本数も多く、いつも座れるので快適だ。

「西の端」という名前の停留所からバスに乗って、唐戸、海響館前、三百目と通過する。いつもはそこで降りるが、そのまま乗って行けば、入江口、細江町、豊前田、下関駅と運ばれる。ある朝ふとこれらのバス停の名称に使われている地名のどれが古いか気がなった。

歴史上の人物や事件を「古い順に並び変えよ」というのは、歴史の試験やクイズでよくある問題だ。普通の町ならバス停の名称にそれほど歴史を感じることはないだろうが、歴史の町下関では、こんなところでも一味違う素材を提供してくれる。

細かな部分には異論があるかもしれないが、これらのバス停の名称を古い順に並べれば、おおよそこういう順番になるのではないだろうか。

西の端↓細江町↓豊前田↓三百目↓入江口↓唐戸↓下関駅↓海響館前

以下では、各々の地名の由来と、地名が成立した時期について考えてみたい。まず、これらの地名の中で最も古い

は、**西の端**で間違いないだろう。バス停「西の端」が置かれているのは市役所すぐ北側、下関市の中心部だ。どう考えても西のはしっこではない。ではなぜ、西の端という名前が付いたのか。

それは、この地名が付いた当時、下関の市街地の西端がここだったからに他ならない。下関で最初に人口が集中し、町を形作ったのは、阿

弥陀寺（現在の赤間神宮）の周辺であったらしい。古い地名という阿弥陀寺町、外浜町、中ノ町、西之端町、赤間町の五か町で形成される地域が「本関（ほんげき）」と呼ばれ、下関のもともとの区域であったと伝わっている。

かつて、現在の唐戸町の辺りは、関門海峡から内陸部に深く入り込んだ湾だった。下関に定住した人々は、この湾のほとりを西端として市街地を形成した。だから、そのほとりが西之端町と呼ばれたのだ。ここよりもさらに西側の地域は、その後の時代に都市化し

たと考えられるので、地名もより新しいと考えられる。文献的には、遅くとも室町時代初期に、「にしのはし」の地名が書かれた記録が残っているという。

次に古い地名は**細江町**だろう。もともとは「細い入江」という意味の地名で、その入江が徐々に埋め立てられて市街地となり、町名が付いた。現在の岬之町か



ら豊前田付近にかけての広い地域が細江町と呼ばれていたらしい。江戸時代の古い地図を見ると、現在の岬之町の辺りが東細江町、現在の細江町の辺りが西細江町となっている。

その隣の**豊前田**も古い地名で、江戸中期の下関の絵地図でもその名前をみかけるが、江戸時代の文献「豊府志略」には、細江の名前がある一方、豊前田は独立した町名としては書かれていないことから、地名としては細江よりも若干新しいものらしい。

豊前田の地名の由来については、下関駅から豊前田商店街に入る入口の道端に置かれた石碑の裏側に、詳しい説明が彫られている。それによれば、かつて豊前田周辺は長府藩の一部ではあったが、その直轄地ではなく、長府藩家老細川家の領地であった。その細川家が豊前国の出身であったことから、その領地の田圃という意味で、豊前田という名前が付けられたという。

バス停**三百目**は、この連載の第一回で紹介したとおり、江戸時代に架けられた橋の名前に由来する地名である。その橋が明治初年頃まで残っていたことを考えれば、地名の成立は江戸時代末期と考えるべきであろう。

バス停**入江口**というのは、王江小学校など山側にふくらんでいる入江町の入り口という意味であろうか。明治時代まで、この入江町の辺りは文字通り深い入江に

なっていた。かつては西細江町の一部であったが、明治初年に分離して入江町ができた。下関の地名としては比較的新しい部類に入る。とはいえ、当時はまだ入江の奥に集落があっただけで、現在のような姿になるのは、明治期に海岸の埋め立てが進んでからだ。

唐戸という地名はもつと新しい。既に述べたように、現在の唐戸の辺りはかつては湾になっていた。下関市は、一八九四年に市独自の手による初の港湾整備として、この湾の埋め立てによって着手した。この埋め立てによって誕生したのが唐戸町である。ちょうど高橋是清が日銀西部支店長として下関に勤務していた頃のことだ。

唐戸という地名の由来は、この地がまだ湾であった頃、その湾口に潮の干満によつて変化する水位を調整するための水門、唐樋（からひ）が設けられていたため、それを起源とするという説がある。近くの田中町の田中川に架かる橋のひとつに、「樋之戸橋（ひのとばし）」があるが、これも同じ起源かもしれない。唐戸という地名が町名として成立したのは、埋め立て工事が完了した一八九六年以降のことである。

バス停**下関駅**の名称を地名と呼ぶのは、ちよつと不自然であるがお許し頂きたい。「下関」という地名だけであれば、上関町にある上関、防府市にある中関と並ぶ海上の関所という意味であり、赤間

関という呼称と同様に、古い時代から使われていたものだ。しかし、京都からの鉄道が開通した一九〇一年当時は、市の名前は赤間関市、駅の名前は馬関駅であった。「下関駅」という名称が使われ始めたのは、翌一九〇二年に市名変更された後のことである。

当時の下関駅は細江町にあった。鉄道で下関まで来た乗客の多くは、下関から船に乗り、九州や大陸に向かった。現在取り壊し工事が進んでいる旧山陽ホテルは、当時のにぎわいの記憶をとどめる建物であった。

この下関駅が現在の場所に移ったのは一九四二年のことである。関門鉄道トンネルが開通し、門司に向かう鉄道が敷設されたのに合わせて駅も移転し、三角屋根の駅舎が建てられた。この伝統のある木造の駅舎は二〇〇六年の放火事件で焼失してしまつたが、現在、この地に三階建ての商業ビルを建設し、駅舎内もリニューアルして「にぎわい空間」をつくらうというプロジェクトが進められている。

今回取り上げたバス停の名称のうち、最も新しいのは**海響館前**である。この名称は、下関市立しものせき水族館・海響館が新築された二〇〇一年以降に使われるようになったもので、もともとのバス停の名称は「西南部（にしなべ）」であった。市役所の場所に建っていた南部城（なべじょう）に由来する古い地名に代えて、

二十一世紀に現在の名称が新しく命名された。

新しい公共施設の名称でバス停や駅の名前を付け替えるのは陳腐になりやすいものなのだが、この改名は成功していると思う。なにより、「海響館」というネーミングのセンスが良い。関門海峡に臨み、響灘にも近い場所柄を的確に表しているだけでなく、海のさざめきが響きあう巨大な展示水槽のイメージが湧き出てくるような、素敵な名称だと思う。

昨年三月に新たに日本最大規模のペンギンプールを設けて新装なった海響館では、三月から十二月の十か月間で、前年同期を五十三%も上回る目覚ましい集客力を示した。隣接する唐戸市場とともに、下関観光の中核としての役割を立派に果たしている。

今回は、たまたま自分が通勤で利用するバスの停留所の名称を並べてみただけだったが、中世から二十一世紀まで、様々な時代の歴史を訪ねることとなった。改めて下関の歴史の奥深さを認識することができたように思う。